10

杉田玄白所蔵のターヘル、アナトミアの所在

寺畑喜朔
金沢医科大学

標題の疑問について解明された資料は「医談」誌、第三巻、第八号（大正十五年三月）に収載の長与又郎述の「クルムス著タブレ・アナトミケーのこと」である。これは大正十五年三月四日、小塚原回向院において開催の第三十五回医家先哲追薦会の記念講演の記録である。

本誌「医談」は明治二十六年六月発行の私立奨進医会の機関誌を源流とし、大正三年四月設立の日本医師協会の機関誌として誌名を踏襲復刊されたものである。

つぎに標題について鮮明となる長与の講演内容の部分を原文のまま抜粋記述する。

小塚原立會の際には蘭化玄白両先生共「ターヘル、アナトミア」各一本を携へ行きたるものと察せらるるされば其翻譯に當りて同志の人々は右二本を用いたること勿論なるべし。蘭化先生所持の「ターヘル、アナトミア」は如何なり行きしや知る人無きが如し。玄白先生所持の分は永く杉田家に傳はり居りしを、明治二十三年第一回日本醫學會に陳列せられたる後、故ありて同家より亡父専齋之を受け繼ぎ、家寶として余が家に蔵せり。

其後醫學會醫史展覧會乃至講演等のある毎に乞はるるが儘に度々之を出陳し千九百九年ドレスデンに開催せられたる萬國衛生博覧會にも出品したることあり。千九百二十一年の夏には瓜哇バタビアに第四回極東熱帯醫學會の開かるるに際し、余は日蘭交通に關する數點の史料と共に本書を携へ行きて、同會の史料展覧會に出品せしが、當時右展覧會部の部長として專ら盡力せられたるはフワン、ルーメル氏なりき。

元来余は我國醫學史上國寶とも見るべき本書を一家の重寶として秘蔵し置くを不本意の事として之を公の安全なる圖書館に寄贈しその保管を依頼するの可なるを信じて、何處に贈るの最適當なりやを考慮すること

多年にして而も其志を果さざるに先ちて大正十二年九月一日は來れり。

余は平素本書を余が家に置くの火災に對する不安を感じ居たれば、寄贈先の決定する迄はとて、之を親戚某の土蔵内の金庫に蔵め置たり。九月一日の震火災にて余の住居家財悉く破壊焼失したれども、彼土蔵は堅牢にして相當に廣き邸地内にある上、「ターヘル、アナトミア」は更に其の内の金庫に入れあることなれば縦令蔵は猛火を蒙ふりて焼落つるとも彼金庫の中だけは萬々安全なるべしと思ひ居たりしに、某の家は一日の夜半に火に襲はれて土蔵も焼け落ちその内にある家財は悉く灰燼となりて、貴重なる「ターヘル、アナトミア」も烏有に歸したり。

彼大震火災によりて余は住家を焼失し、多くもあらぬ書籍家財等の大半を失いたるは當時人竝の災厄として、深く意に介せざりしも、獨り彼の「ターヘル、アナトミア」を失いたることは先哲に對し申譯なき罪過を負へる様覚へて痛恨禁ずる能はざりき。

以上により、玄白所持の「ターヘル、アナトミア」の所在の顛末が明白である。

ちなみに、ターヘル、アナトミアの展示史料を検索すると、第一回日本医学会誌（明治二十三年四月）には杉田玄白先生遺品（杉田氏所蔵）として展示されており、第二回日本医学会誌（明治二十六年四月）には、解体新書翻訳の際用いた原書で一千七百三十一年アムステルダム府刊行と注釈して杉田　武氏が展示要請に応じている。長与専齋（明治三十五年逝去）が杉田家から保管を委託されて以来、関東大震災の焼失まで学会などの展示要請により、その機会に多くの学会出席者は玄白先生所蔵のターヘル、アナトミアに接したはずである。

いまさらのごとく、天災、戦災による文化財の消滅を嘆かざるを得ない。といって、医史料の保存管理を怠ることなく、鋭意取り組まねばならない。